



## 全国制覇を成し遂げた スーパー高校生棋士

# 一手一手 広く深く

藤井聡太四段が公式戦29連勝という記録を打ち立て、巻き起こした将棋旋風。天才と目される彼も幼少期は数多くの負けを経験し、その悔しさを糧に努力を重ねてきたという。市内にもそんな藤井四段のように敗北の悔しさをバネにして、数々の将棋大会を制覇してきたスーパー高校生棋士・阪本駿さん(3年)がいる。昨年8月には、**全国高等学校将棋選手権大会で東京の名門進学校・開成高校や麻布高校を抑え、見事優勝を果たした。**今月中旬には、**高校生活最後の全国大会に挑む。**彼の将棋にかける思いを聞いた。



得意な戦法は三間飛車。飛車を角側に移動させた上で攻めを展開していく



大会で優勝し、獲得した扇子。「飛躍」と広瀬草人八段の自筆サインが書かれている

パチン

畳張りの部屋の静寂の中、数秒おきに駒を指す音が響く。盤に真剣なまなざしを向ける阪本さんは「将棋は一手で勝敗がひっくり返ります。いかにあらゆる先の手を読んで、今必要な最善の手を指すか、それが将棋で勝つための鉄則なんです」と口を開いた。

彼が将棋を始めたのは5歳のとき。アマチュア四段の父に、遊び感覚でルールを教わったのがきっかけだった。

「将棋は難しいというのが第一印象でした。駒によって役割が違うし、広く手を読む集中力も求められますから……。ただ、局面が毎回異なり、飽きずに楽しめる将棋の奥深さを知って、どんどんのめりこんでいきました」。

そんな少年は小学校に入学後、将棋教室に通い始め、次第に頭角を現していった。

「通い始めた当初は全く勝てず負け続けてました。自分の力不足と分かっても悔しくて、トイレでこっそり泣いては顔を洗ってごまかすこともありました。とにかく自分の納得いく将棋を指して勝利をつかみ取りたい。そのた

めに、教室の師匠に教えを乞いたり、プロの棋譜を必死に覚えたり、積極的に格上の相手に挑んだり……。常に将棋のことばかり考えてきたと思います」と、これまでの12年間を振り返った。彼は敗北の悔しさを日々の努力に変えることで、数々の大会で結果を残すまでに成長していった。

中でも彼が印象的と話すのは、昨年8月に優勝した全国高校将棋選手権大会。「将棋の強豪校に入学したのは全国制覇が目標だったから」という言葉からも、大会にかける熱が伝わってきた。

「1年のとき、2年の先輩2人と団体で全国制覇を目指したのですが、準々決勝で東京の麻布高校に敗れてとても悔しい思いをしました」。何がよくなかったのか、自分だけでなく仲間とも研究を重ね、1年後にリベンジに臨んだという。2回戦で麻布高校と当たったが、前回の教訓を生かして一手一手大切に指すことを心掛け、見事快勝した。

「決勝で先輩がぎりぎりの対局を制してくれた瞬間、何にも代え難い喜びと感動で包まれていたのを記憶しています。あのメンバー

で目指す最後のチャンスですから、それを見事ものにできたあの日は「将棋をやってて本当よかった」と実感した一日でした」と笑顔で語った。

今月中旬には個人戦で高校生活最後の全国大会に臨む。「対局中は誰も頼ることができず、目の前の駒と向き合うしかありません。会場の雰囲気にもまれないよう、自分の将棋を指せるように一日一日を大切にしていきたい」と駒が並んだ将棋盤を眺めた。日々の将棋の練習メニューには、詰将棋やAI(人工知能)を用いたゲームも取り入れているとのこと。

「自分にとつての将棋は生きがいです。その将棋と出合うきっかけを与えてくれた父に感謝しています。遠征に参加できるのもサポートがあつてのことですし、なにより父は今でも尊敬できる棋士の一人。結果を出すことで一つでも多く恩返ししたいんです」。

今、藤井四段の話題で将棋界も盛り上がりを見せている。「自分も将棋の普及に貢献できるよう、生涯現役で将棋を続けていきます」と話し、持っていた銀を盤上に力強く指した。

※1 対局で互いの対局者が行った手を順番に記入した記録のこと。

※2 盤上に並べられた駒の局面から、相手の王将を詰める手順を考えるパズルのようなもの。終盤の攻め方の戦術力が鍛えられるという。



阪本 駿 さん (17)

文星芸大付属高等学校3年。関東・全国規模の数々の大会で上位入賞を果たす。礼節を重んじる面も将棋の好きなところ。段位は四段